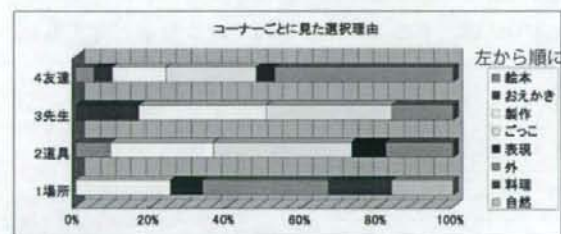


◇データ数は少ないが、学年別に子どもがコーナーを選択する際の理由には明らかな違いが見れた。

◇年少の子どもは、物理的環境の選択肢を選ぶ傾向があり、「道具が好き」を多くの子が選択した。今調査では、友達がいるから選択する子どもはいなかった。年中の子どもは、人的環境と物理的環境が選択される割合はあまり変わらず、4つの選択肢に回答が分かれた。年長の子どもも、人的環境と物理的環境が選択される割合はあまり変わらないが、それぞれの内訳で、「先生がいるから」よりも「友達がいるから」、「道具が好き」よりも「場所が好き」が多く選択されている。

◇この結果を物理的環境、人的環境の各項目別の視点から考えると、年少の幼児は年齢を重ねると、物理的環境から人的環境に着眼して場所を選択する傾向が強くなる。しかし、物理的環境から人的環境に、選択理由が完全に移行するのではなく、人的環境と物理的環境の両方に影響を受けるように変化していく。物理的環境の内訳では年少の頃は、個々の道具や遊具を判断していたが、歳を経るごとにコーナー空間を全体として捉える視点が生じてくるのではないかと推測する。人的環境においても、回答の内訳は先生中心から友達が中心に移行していくと考えられる。



図表 D 9 コーナーごとの選択理由 (グラフ)

	1 場所	2 道具	3 先生	4 友達
絵本	0	1	0	1
おえかき	0	0	1	1
製作	0	3	3	3
ごっこ	0	0	4	5
表現	1	1	0	1
外	4	2	1	10
料理	2	0	0	0
自然	2	0	0	0

図表 D 10 コーナーごとの選択理由 (表)

◇コーナーごとの選択理由を見ると、データ数は少ないので、考察を行うことは難しいが、回答の傾向から子どもの選択がコーナーの持つ機能と整合性があることは読み取れる。

「場所が好き」では、外遊び、料理、自然の園庭に空間の仕切りのコーナーで選択されている。「道具が好き」では制作、ごっこなどの道具や遊具などの物を使って遊ぶコーナーが選択されている。先生がいるからで選択された制作・ごっこのコーナーは、遊びの中で先生の援助を必要とする場面が多い。「友達がいるから」では、友達と関わりながら遊ぶことが多いごっこや外遊びが選択される割合が高かった。

D-3. 特徴的な子どものコメントからの考察

◇ヒアリング調査のデータだけでは分からない実際の子どもがコーナーを選択する際の影響要因も多い。子どもにヒアリングを行った際に子どもが発した言葉の中で、子どもがコーナーを選択する際に関係があると思われる発言や行動から考えられる影響要因を考察してまとめた。

○子どもの個性や発達段階の能力による興味の差異

特徴的な子どもの発言：「製作が得意」、「本が好きだけどあまり読めない。」

異年齢の子どもが同じ空間で遊んでいても、その空間で行われる行動は子どもの身体的能力、知識によって差異がある。その差異は、子どもの年齢だけでなく性格などの個性によってもたらされるものも多い。また、子どもは遊びながら成果を出して、その成果を先生や親などの身近な大人に見せることにより褒められる。その流れに沿って自信や意欲に繋げていく。子どものコーナーを選択する際に影響を与える要因になるのではないのだろうか。その時の子ども自身が興味を持って取り組んでいるものや、子どもが意識していることによって、コーナーの選択に影響を与えると考えられる。

○その日の気候によって選択の変化

特徴的な子どもの発言:「外は寒いから。」「温かいから。」

主に外遊びをしようと玄関に出ようとしたときに、寒いことを理由にして引き返す場面があった。調査を行ったのが11月なので、日によって寒暖の差があった。また、雨上がりで園庭にぬかるみがあるために、外遊びで使える範囲が限定されてしまい、子どもの数が少ない日もあった。気候による変化はコントロールができないので、可動な外の遊具の配置を変えるなど保育者が対応していた。子どもが場所を選択する際に常に不動の同じ選択肢から選ぶのではなく、日によっては機能しない環境もあり、子どもは日々変化している環境に応じて選択していることに留意したい。

○恒常的に好きな空間とその瞬間に行きたい空間の違い

特徴的な子どもの発言:「久しぶりに制作に行った。厚紙がなかなか使えなかったけれど使ってみたら楽しい。」「今いるところが好き。」

子どもの言動から、子どもはどこの場所が好きかと答える際に、瞬間的にその時の気持ちでどこの場所に行きたいかを答えた場合とそれまでの経験から好きか嫌いかを判断する場合があると思われる。後者は経験を積むことによって為されるので、年齢を重ねるにつれて増加すると思われるが、5歳児においても、自分が今やっていることが好きと答える子も多い。また、瞬間的な判断は、経験を基に為されているかもしれないが、それは確かめようがないので、この二つの動機の境界は、曖昧で判然としない。

○同調性、友達と行動を合わせる。

特徴的な子どもの発言:「友達が外に行こうと言って、くつを履いて走って行ったら楽しい。」「友達と一緒に〇〇を作るのが好き。」「みんながいるから。」
「〇〇ちゃんと一緒。」

年少から年少の子どもまで、年齢を問わず多くの子どもに見られる言動の傾向である。実際に場所を選択する際に、その子とその時に最も行きたい場所の答えや要因は、一人の子どもが持っているものが答えにな

るのではなく、複数の子の意志と関係性の中で合意形成された結果である場合も存在すると考えられる。

○アフォーダンスと関係ない機能を空間・道具から意味を創造する力。

特徴的な子どもの発言:「登る遊具が好き。座ってられるから。待ち合わせできるから。」「ポケモンごっこをするのが好き。」

道具が子供の行動を誘導する際に、大人が認識する意味とは異なるものを見出すことがある。例えば、写真で示された、登ったり、覗いたりして遊ぶ遊具に子どもは、座って、待ち合わせできるから好きであると言う意味を与えていた。(登園時間が子どもによって異なるので、同じコースの遊び仲間がまだ来ないので待ち合わせをするという意味を与えたものと考えられる。また、ごっこ遊びに特徴されるように、子どもは関係のない空間から創造して遊びを形成する。制作のコーナーにて、自分でごっこ遊びの道具を使って遊ぶという自ら物理的環境を作り出して遊ぶ子どもの姿も多く見られた。

D-4. 調査Ⅱのまとめ

調査Ⅱ園児へのヒアリング調査を通して分かったことをまとめる。

○分析・考察から明らかになったこと

対象園児全体の傾向

・園児に好きなコーナーを聞いた結果、外遊び、ごっこ、制作に回答が集まった。子どもがコーナーの中で自ら遊びの内容を選択できるものに人気集中したと考えられる。

・子どもが好きなコーナーを選択した理由としては、友達の存在を挙げる子がやや多く、先生存在を理由として挙げる子は少なかった。

・子どもが好きなコーナーを選択した理由において、物理的環境(空間、道具)と人的環境(先生、友達)を選択した割合は、ほとんど均等だった。これによって、子どもが遊び場所を選択する際に、物理的環境だけで

なく、人的環境も影響要因として働くことが明らかになった。

男女別の差異

・男女の場所選択の比率はほとんど等しく、女子がごっこコーナー、男子が制作のコーナーを好む傾向があることが読み取れた。

・選択の理由を見ると、女子が先生存在を理由として選択する割合は、男子のそれよりも高いと推測される。

年齢別の差異

・年長（5～6歳児）、年少（3～4歳児）の場所選択の割合は全体の傾向と類似しているが、年中（4～5歳児）の子どもは、選択した場所は分散する傾向が見られた。

これは、4～5歳の年中の園児は、初期の段階で多くの空間に興味を示して、その後、年長になる事で、空間への認知能力が発達して、同じ空間で経験を積み重ねて、明確な自分の意思を形成するようになったと考えられる。

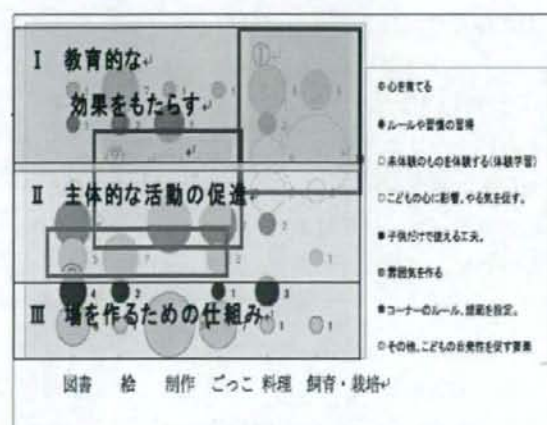
・選択の理由は、年齢を重ねるに連れて、経験と発達により、選択の理由は道具を中心とした物理的環境の依存から、友達を中心とした人的環境と物理的環境の両立に変化していく。物理的環境の内訳も場所を選ぶ子が増えていく。

子どもの言動から分かったこと

・子どもの場所の選択には、個性や子どもの能力に基づく興味の差異、気候による影響、子どもの瞬間的な感情と恒常性の違い、同調性、子どもの空間の意味を創造する力などにも影響を受ける。

E. 総括

E-1. 調査Ⅰ・Ⅱを通してのまとめ



図表E1 コーナーと評価内容の関係（再掲・加工）

○調査Ⅰ・Ⅱを通して分かったこと

調査Ⅰの保育者へのアンケート調査を通して、コーナー保育の特性が明らかになった。

コーナー環境とは、目的を持って、定められた機能に集約するためにつくられたものであると言える。図表29中の①で示したように、評価分類Ⅰの「教育効果を与える」に特化してコーナー自体が教育効果をねらいに持ったもの（クッキング、飼育・栽培コーナー）と②で示したように述語の評価分類Ⅱで表せる「主体的な活動を促進」に特化して、コーナーの機能を通して様々なことを教育していこうとするもの（図書、絵、制作、ごっこ）の2分類が考えられる。

そして、遊具が多様なコーナーも実は、1つの機能に集約するために配置されていると考えられる。また、1つのものを配置することで多様な目的を持った物も存在する。ただし、コーナー環境を形成するものは、物理的環境だけではなく、保育者が考える意図やルールなどから生じる心理的環境と補完しながら環境を形成していると考えられる。

調査Ⅱのこどもへのヒアリング調査では、子どもの好きなコーナーは、子どもが自発的に活動可能な空間であり、コーナーを愛好する理由は物理的な環境だけではなく、人的な影響を受けていることが明らかになった。また、子どもは年齢と共に経験を積み、発達をしていくに連れて、空間への興味のあり方や自分が行く

コーナーを選択理由も変化していくと推測される。また、物理的、人的な要因だけではなく、子どもが環境を選ぶ際に、気候や子どもの個性、その時の気分など様々な影響要因が存在することが分かった。

考えられる。

参考文献

- 1) 空間認知の発達研究会 編：空間に生きる—空間認知の発達研究会一、北大路書房、1995
- 2) 小田豊 湯川秀樹 編著：保育ライブラリ 保育の内容・方法を知る 保育内容 環境、北大路書房、2003

○子どもと空間の関係性

調査を通して子どもと大人の留意すべき差異は、「子どもは変化していく動物である」と思われる。情緒的に瞬間的な気持ちの移り変わりが速いと言う意味ではなくて、発達や経験から成長していく速度が速いと言う意味である。調査で明らかになったが、子どもは場所を選択する理由も変化している。その点を留意すると、従来の保育施設は、変化しない「箱」のようなものであり、子どもの成長に対して、その時に必要とされる環境をどの程度まで提供することができたのだろうか。子どもが変化することに対して環境もより変化していく必要性があると考えられる。

○評価の指標を考える

環境が変化していく必要であることに対して、コーナー保育は、多様な遊具や道具、コーナー内の行動の選択の自由から、子どもの必要性を満たしてきた側面がある。しかし、コーナー環境の評価すべき点は環境を物理的環境だけではなくて、心理的環境の側面からも様々な意味をつけていくことであると考えられる。環境づくりを考える際に、物だけで環境の問題を片付けようとしても、そこには物理的や経済的な制約があるために限界がある。しかし、心理的環境の側面から価値を見出すことに制限はかかりにくく、意識と工夫次第で物理的な変化は少なくとも、空間の持つ意味を変化させることは可能であると思われる。

環境の評価の指標として、正確な心理的側面を測定することは難しいと思われる。しかし、心理的な環境を顧みず、物理的環境だけで環境の価値を見だそうとすることは、大事なものを失ってしまうのではないと思われる。また、物理的環境をなしに心理的環境はあり得ない。従って、環境づくりの指標を考えるときに、どの程度、物理的に由来する価値か心理的に由来する価値か尺度を考えて作ることが大切なのではないかと

Ⅲ．研究成果の刊行物

既刊行物は特に無い。

2009 年 3 月現在、

日本建築学会の査読付論文 1 編が審査中である。

2009 年度には、

- ・日本建築学会の査読付き論文 2 編
- ・日本建築学会大会学術講演オーガナイズドセッション 2 編
- ・こども環境学会大会発表 1 編

の発表を予定している。

IV. 研究成果の公表会

本研究の今年度公表報告会として、2009年3月14日に認定こども園こどものもりにおいて研究会を行い、大学の研究者、保育所職員、保育系協会、建築家、保育雑誌記者など計23名の参加者を得た。

代表研究者が司会を務め、既述した分担研究1～4についての話題提供を20分程度ずつ行い、会場を交えた討論を行った。

◆プログラム

日時：2008年3月14日（土） 13:30～16:30

会場：認定こども園 こどものもり（埼玉県松伏町）

司会：佐藤将之（早稲田大学）

■話題提供

1. 保育者と幼児からみたコーナー環境の評価に関する研究

白石雄貴（早稲田大学人間科学部）

2. 保育施設における整備状況の実態とその評価

倉斗綾子（母子愛育会・早稲田大学）

3. 保育室での活動実態からみた活動面積・密度と評価の関係についての考察 —アンケート調査と実態調査結果の概要報告

山田あすか（立命館大学）

4. 幼児の心理的セルフ領域の形成に関する研究

早川亜希（椋山女学園大学大学院）、橋本雅好（椋山女学園大学）

■討論：こどものもりスタッフ、会場交えて

次のページに質疑等記録を記す。

1. 質問・回答

Q: 「直接的」「補助的」とはどのようなことか?

教育活動の中では人的環境が大切であり、施設を「直接的」と言ってしまうのか? ある意味では施設は「補助的」ではないだろうか?

A: 「直接的」な効果: そのコーナーが存在すること、そしてそのコーナーで子どもたちが遊ぶことによって得られる効果。

「補助的」な効果: そのコーナーに子どもが実際に行き、遊ぶことを促すような効果。

Q 「コーナー」とはどういう定義なのか?

「専用」ということなのか、「仕切る」ということなのか?

A: 仕切っていることは必要ではない。壁際にある机に座るとお絵描きができるような所もコーナーである。

アンケートに書かれていたコーナーは保育者のそれぞれの感性によるものなので、定義がばらばらになってしまっている。統一的定義で見ると、分析結果に精査がもたらされるか、これから取り組んでみるつもりでいる。

「コーナー」のつくりによっては、使われやすいコーナーも、そうでないコーナーもあるだろうし、コーナーのつくりによって滞在時間が異なるなどのこともあるだろう。それは、別の検討課題である。

専用かどうか、長・短それぞれの時間的観点から考えれば完全に常設のコーナーは存在しないであろうし(1日の間で変わることも、数ヶ月で変わることも、数年で変わることもある)、無理に定義をすることではない。

Q: 各コーナーの規模はどのくらいの利用人数を許容できると考えられているのか?

必修のコーナー、季節のコーナーは最大でどのくらいの子どもたちが活動できるのか?

A: 3歳以上の子どもたちは全部で150人ほど在園している。クロークのコーナー、絵のコーナーは全員が入るには狭い。しかし、子どもたちは一斉に登園(バス通園)してくるのではなく、会社の時差出勤と同じようにばらばらに登園してくる。朝の登園をしてくるなかで一番多くなるタイミングで、60人ほどになるので、50人ほどの子どもたちが活動できる。大ききで作られている。

テーブルのセッティングは小学校のようなみんなが同じ向きで座るものではない。子どもが間を通ることができ、ぶ

つからないような配置になっている。

造形のコーナーは子どもたちがとても多くなることがある。このコーナーでは座って何かを作るというのではなく、立つて真中にあるテーブルに集まって作る形になっている。作るための道具はバックの中に入っていて、道具を取ってテーブルに行き、物を作って、そして他のコーナーに遊びに行くというようになっている。テーブルの周りには多くて20人ほどの子どもたちが集まれるようになっていて、そのテーブルが2、3か所用意されている。

子どもたちは希望するコーナーに席がない場合は、空くまで待つことになっている。(全員分の席を用意しているわけではない。)

→ 「待つ」ことも一つの学習をしている。

ランチルームも150人全員がはいることはできず、食事の時間を3回に分けている。(1回目 60人、2回目 60人、3回目 30人) これは登園した順番になるようになっている。

→ 各コーナーが飽和せずにそれぞれで充分に遊べるようになる。

全員が必ず使うコーナー、同じタイミングで一斉に使うコーナー、自由遊びに使うコーナー…などにより規模の設定もちがう

→ コーナーの規模を「空間としてどのくらいの大きさがどのくらいあるか」ということで考えるだけでなく、時間的な要素も含めるべきではないか?

子どもたちの環境を考える際、0、1、2歳児の環境が重視されている。規模に関して、現在は「最低基準」というもので考えられているが、それよりも「こどもにとってふさわしい規模の基準」というもので議論していくことが重要ではないか?

Q: コーナーというのはどのくらいの設えからコーナーとなるのか? アンケートで、理想の人数規模を訊いている質問があるが、その答えがどの程度であったかまとまっていたら教えて欲しい。

A: どのような大きさでもコーナーである。その中でよく使われるコーナー・あまり使われないコーナーや、いろいろな遊びが展開できるコーナー・一つの遊びに特化したコーナーが存在する。

小さい子どもたちの場合コーナーを作りこまなくてもよいことがある。小さい子どもの場合は場所をあまり意識し

ておらず、好きなおもちゃ・好きな保育士さんがいるところが好きな場所になっている。成長してくるにつれて、場所と物と行為が連動して好きな場所になっていく。

→年齢によってコーナーの意味合いが違ってしかるべき。

季節による変化があるので「完全な常設のコーナー」というものではなく、季節・時間的な評価をしていくことが大切である。

「理想の人数」を訊いているが、これについては、回答から得られた平均値などが1人アルクすることが危険と考え、アンケートから得られた数値をそのまま用いるのではなく、現場の様子と併せて示していきたい。(例えば、アンケートの中の「保育室の評価」で「ちょうどいい」というものが非常に多かったが、保育園の先生方はいまの保育室のなかでそこにある環境を作っている、「現在のものでベストを尽くしている。だからちょうどいい。」という捉え方をされているのではないと思う。規模などの基準や標準を提案する際にはこの「ちょうどいい」という評価をそのまま鵜呑みにすることはできないので、慎重に扱う必要がある。)

Q: こどものもりにおいて今の規模が最適であるかどうか?

A: こどものもりは幼稚園と保育園が一体となったものとして考えて建てられた。

幼稚園の定員が200名であったが、一体型のものにするためにその当時の最低の定員(幼稚園105名、保育園50名)に変更した。理想はより少ない人数で保育を行いたいと考えていた。建物の規模もこどもの人数もこれ以上は大きくしたくない。これ以上大きくなると、保育士の目が行きとどかない場所ができてしまう。こどもが遊びたいコーナーで遊べなくなってしまう。

時期によって様々なコーナーがあり、今あるコーナーを最善のものと考えずに、子どもたちの遊んでいる様子を見ながら、コーナーの大きさ、場所を決めていく。その時期のこどもたちの姿に合わせ、スタッフの話し合いの中で、自由に動きのとれるコーナーを作る。そのために壁の取り払われた園舎になっている。

2. こどものもりの先生方のお話

～こどものもりでは「コーナー」をどのようにして取り扱っているか?～

・保育園の園長先生

園全体を一つの保育室としてとらえ、その中で子どもた

ちが遊びたくなるような場所を提供する。その場所がコーナーである。(→ 保育室の通常のイメージと違った室になっている。)

壁を取り除くことで、園全体を一つの空間にする。

先生が子どもたちを主導していくのではなく、子どもが自分の意志で遊びを選択するような場所、コーナーを提供する。

保育者は「仕掛け人」である。子どもをコーナーに連れてきて遊びを行わせるのではなく、子どもが自分から遊んでみたいと思えるように援助をしていく役割を持つのが保育者である。大人が主体になり前面に出るのではなく、後ろから子どもたちを見守るようにする。

大人が入口に立った時に「遊びたい!」と自分で思えるような部屋を作ることが大切である。

(保育室内の環境設定としての「お片付け」について) 環境設定の目的として、子どもたちが先生に言われて片付けるのではなく、自分で使ったものを自ら片付けられるように、子どもがやりやすい(わかりやすい)ようにする。

ex 片付ける物の写真(絵)を棚にはっておく。

ハサミなどは子どもたちの数えられる範囲の数(例えば5)ずつ箱に入れておく。

同じ色のマジックが5本ずつ入るような箱を作り、同じ色のテープを貼っておく。

・外遊びコーナー担当の先生

子どもが遊びたくなるような仕掛けが必要ではあるが、魅力的な場所が多すぎると子どもたちがまよってしまう。→各コーナーでさらに充実して遊ぶために、コーナー同士の連携が重要。

ex 造形コーナーで作ったものでおまごをやる。造形コーナーで作った風を外であげる。

そのためにはコーナーの先生たちのミーティング、先生同士のつながりが大切。毎日、各コーナーの様子を報告し、話し合い、翌日以降のプランニングをしていく。

・自然コーナー担当の先生

季節の物を栽培・収穫・調理し、さまざまな経験することが目的である。

居心地がよく、温かい雰囲気のある空間を作ることによって子どもたちが集まる。

子どもたちが自主的に行動できる空間をつくる。→自分でやろうとする。

・「こどものもり」のコーナーの説明

7つのコーナーがある。

①クロークのコーナー

お着替え、自分の荷物の整理のための場所。子どもたち同士で助け合い自立を促す。

②絵のコーナー

毎日、園にやってきて、好きな絵を必ず1枚描く。自分の気持ちを園のモードにするために、絵を描いて気持ちを落ち着かせる。園に来るまでの気持ちが絵に表れてくる。毎日、描いた絵を自分の引出しにしまうことで、自分の持ち物の整理整頓を学ぶ。

③造形のコーナー

i) 廃材を利用して、自分の好きなものを自由に作れる場所。

ii) 季節の物を作る場所。(先生たちがふさわしい材料を用意して、子どもたちが季節の物を作りやすいように環境を作る。)

④ごっこのコーナー

いろいろな生活体験をできるようにしてある場所。行事に影響されやすい。(ex 健康診断→お医者さんごっこ、年賀状(正月)→郵便屋さんごっこ)

⑤表現コーナー

楽器に触れて遊べる場所。音楽、劇遊び、大型積み木 etc

⑥外遊びのコーナー

砂場、体を使って動くことのできる場所など様々な種類が含まれている。

⑦自然のコーナー

飼育・栽培のための場所。野菜の収穫や花の栽培をおこなえる。小動物とのふれあいもできる。

まとめ：佐藤

現状の調査・分析によると、倉斗、山田らの報告から保育施設環境の評価は、1人あたり面積というよりも、活動面積の大小やクラスの園児数の影響が強いことがわかった。

また、白石・早川らの報告から学齢が上がるにつれて環境に対して巨視的になっていくことが明らかになった。

今後さらに、活動展開や空間把握発達に関する研究等の追加調査・分析を行い、保育施設環境の適正規模の導出を進めていく。

厚生労働科学研究費補助金
政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）

保育・生活場面の展開と心身や空間把握能力の発達からみた
保育施設環境の所要規模に関する研究

平成 20 年度 総括・分担研究報告書
（2 年計画の 1 年次報告書）
研究代表者 佐藤将之
平成 21 (2009) 年 3 月

早稲田大学人間科学学術院 助教 佐藤将之
〒 359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15
E-mail: masayuki57sato@yahoo.co.jp